
共同研究の概要と経過

西谷 大

この特集は「東アジアにおける多様な自然利用—水田農耕民と焼畑農耕民」によって、平成 16 年度から平成 18 年度にかけて実施した共同研究の報告である。

1 研究の概要

アジアでは、稲作栽培を基盤として、中国をはじめ、朝鮮半島、東南アジア、そして日本列島という広範囲にわたって、独自の多様な地域文化を作りあげてきた。この事実一つを取り上げてみても、弥生文化を「稲作文化」や「農耕文化」そのものだけに特徴をもとめることにあまり意味がないことに気づく。弥生文化が稲作農耕を基礎としたことは間違いのない事実ではあるが、東アジアの各地域文化や過去の農耕社会などを比較するには、異なった視点が必要になってくる。

その一つが、国家権力が強固な中央集権的構造をもつ中国の周辺における、自然利用の歴史の変容と現在を知ることでありと考えられる。中国的な集約農耕は、畑作農耕地帯で発生し、周辺地域へと拡散しながら各地に大きな影響を与えてきた。その拡散の様相は、稲作農耕地帯や畑作農耕地帯といった、生態学的基盤の分類とは、まったく別のイデオロギーが働いている。言い換えれば、東アジアの農耕の変遷は、中緯度地域に発達した、特異な中国的集約農耕が、周辺地域の非集約農耕地帯、または農耕社会ではなかった地域を飲み込んでいく歴史としてとらえることも可能ではないかと考えている。

現在でも進行しつつある国家周辺地域における自然利用の変容の姿を明らかにしつつ、さらにその結果を過去の事象にもあてはめ、歴史的な文化変容の理解に応用しようとするのが本研究の目的である。

もう一つの視点として、稲作、畑作、焼畑などの農耕の農業生態学的な共通性が、国家政策や地域文化とどのように交錯し、それぞれの地域の固有性を生み出しているかを明らかにすることである。

2 研究組織

西谷 大 国立歴史民俗博物館・考古学 総括・歴史の変容

篠原 徹 国立歴史民俗博物館・教授・環境民俗学 焼畑農耕民の実態

安室 知 国立歴史民俗博物館・助教授・民俗学 水田農耕民の実態

大場秀章 東京大学総合研究博物館・教授・植物分類学 環境に関する植生学的研究

梅崎昌裕 東京大学・人類生態学 焼畑・水田農耕民のエスノサイエンス GIS システムの応用
津村宏臣 東京芸術大学・助手・文化財解析 GIS システムの応用

3 調査経過

調査の概要

研究をおこなうにあたって、初年度はこれまで共同研究のメンバーおよび、日本各地の生業研究者がおこなってきた地域研究に参画しつつ、中国周辺における自然利用の変容と、地域の固有性の姿を明らかにすることを目的とした。毎回の研究会は、国内の調査地で実施し、研究内容のより一層の理解をはかることにした。

また次年度は、特に中国における自然利用の変容が、どのような要因によって引き起こされているのか、その構造的な分析をおこなうことを研究会の目的とした。研究会は、国内の調査地で実施した。

最終年度は、2年間におこなった研究をもとに、海外の調査地で調査検討をおこない研究の総合化をはかった。さらに、海外の現地研究者との討論をおこなうため、日本で国際シンポジウムを開催した。

研究会等

〈平成16年度〉

第一回研究会 1月21日～24日（平成17年）

滋賀県近江八幡市沖島での琵琶湖における淡水漁撈の調査

滋賀県大津市仰木地区での棚田調査

現地での研究会

卯田宗平 「外来魚種への対応とその評価に関する考察—霞ヶ浦・琵琶湖・河口湖の釣果動向に関する湖沼間比較の視点から」

第二回研究会 2月7日～8日（平成17年）

千葉県鴨川市 大山千枚田での棚田調査

千葉県勝浦市 勝浦朝市の調査

現地での研究会

厚 香苗 「香具師系露店商の民俗学的研究」

第三回研究会 2月22日～24日（平成17年）

長野県千曲市八幡嬢捨更埴市 姥捨棚田の調査

岐阜県高山市 高山市の調査

〈平成17年度〉

第一回研究会 5月13日～15日

高知県池川町椿山周辺 焼畑調査

高知県高知市 日曜市の調査

第二回研究会 10月28日～30日

長野県飯田市上村下栗 山地利用と雑穀調査

静岡県静岡市葵区井川 雑穀調査

第三回研究会 11月1～2日

国立歴史民俗博物館

南真木人 「ネパールにおける焼畑農耕」

梅崎昌裕 「海南島リー族におけるエスノ・サイエンスの実態」

蔣 宏偉 「中国農村部の市場経済化による生業システムの変容—海南島五指山市保力村の調査より」

なおこの研究会は、はじめての試みであるが、安室知と共同で主催し、安室が代表である「日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究」の共同研究メンバーにも参加してもらい、多角的な視点から議論の内容をより深めることを目指した。

〈平成18年度〉

第一回研究会 7月9日～10日

奥州市牛の博物館

黒沢弥悦（牛の博物館学芸員）「東アジアにおけるブタの家畜化」

西谷 大 「中国のブタ便所からみた家畜の内部化」

篠原 徹 「農耕周辺の環境利用の多様性とその意義」

第二回研究会

2月10日～13日（平成19年）

新潟県の新津市六斉市、村上市六斉市、黒川村で現地調査

川又正知（国士舘大学）「漢代以前のシルクロードをめぐる人と馬の関係」

第三回研究会

3月24日～25日（平成19年）

シンポジウム 「ブタ・ウシと人間の文化誌」

主催：国立歴史民俗博物館

共催：牛の博物館

会場：牛の博物館

奥州市前沢ふれあいセンター

3月24日 シンポジウム・第1日目

篠原 徹, 総合司会

太田 至 「東アフリカ牧畜社会における人-ウシ関係：家畜管理技術を中心に」 基調講演

小谷真吾 「パプアニューギニア社会におけるブタの役割（1）—高地辺縁部の事例」

梅崎昌裕 「パプアニューギニア社会におけるブタの役割（2）—高地社会の事例」

蛸原一平 「西表島のイノシシ猟とバヌアツのブタ」 安室知コメント

朱 有田 「A tale of miniature Lanyu pigs: A laboratory pig and a role in tracking Asian human migration」

野林厚志 「中国農村社会におけるブタの多面価値（仮題）」

黒澤弥悦 「東アジアにおけるブタの家畜化をめぐる諸問題」

篠原 徹, 司会・総括・総合討論

3月25日 シンポジウム・第2日目 市民むけの公開シンポ（案）

篠原 徹, 総合司会

曾我 亨 「家畜がつくる人の社会：ウシとラクダ」

Rajendra Prasad 「ネパール人にとってのブタとウシ」

西谷 大 「古代中国の動物観—ブタ, ウシ, ゾウ, サイ, ウマ, ライオン」

野林厚志 「中国におけるブタとウシの民俗（仮題）」

梅崎昌裕 「ブタとサツマイモとウシ：パプアニューギニア調査より」

4 研究成果の概要

東アジアの特に日本と中国では、同じ棚田という概念でくくられる水田も、地域によって多様であり、その特質を明らかにするためには、水田の機能そのものの比較だけでなく、焼畑などの他の生業がどのように水田に取り込まれてきたのかを探る必要がある。

研究会を進めていくなかで、中国の棚田地域では、水田農耕民、焼畑農耕民、狩猟採集民は、日常的生活レベルにおいて非常に密接な関係があることが明らかになってきた。特に、市の存在はそれぞれが生産した作物を交換するなど重要な役割を果たしていた。東アジアの水田農耕民、焼畑農耕民の自然利用やその変容を考える上で、「交易」という視点が重要である。

そのため現地調査として、千葉県勝浦の朝市、岐阜県高山の朝市、高知県高知市の日曜市、新潟県の六ヶ所市などの市の現地調査をおこないつつ、現地で研究会を開催し、中国などの定期市とどのようにシステムが異なるのか、また地域における生活世界との関わりあいについて討議をかさねた。

さらに東アジアを広くみると、水田稲作とブタ、ウシ、ウマなどの家畜の結びつきは非常によいのに対して、日本では食料としてブタなどを積極的に飼養してこなかった歴史をもつ。こうした日本の地域性を理解するために広く東アジアの歴史上の家畜と人の関係をさぐる必要のため、次年度はゲストスピーカーとして、黒澤弥悦氏と川又正知氏に発表をお願いした。さらに、討論を深め

るため最終年度は「牛の博物館」で国際シンポジウムを開催した。

明らかになってきたことは、棚田、焼畑、家畜、狩猟採集というそれぞれの生業を個々にとりあげ研究するだけでなく、生業システムとして相互の関係性を把握する必要があるということである。さらにそこに市＝交易の存在を考えつつ、地域の生活世界を統合的に明らかにすることが、東アジアの人々にとって、水田や焼畑がどのような意味をもっていたかを理解することにつながると考えられる。

さて、日本各地で生業調査をおこないつつ、研究を重ねるなかで、問題になってきたのは、日本の自然利用において、「里山」というパラダイムについてである。欧米流の自然保護とは、北米で19世紀末に成立した「手つかずの原生林」という自然観を基盤としたものがあった。人びとの影響を排除した自然保護という理想は、例えば植民地支配下で自然保護行政が本格化するアフリカなどで、立ち退きによる大規模な土地囲い込みとして実行され、今日まで住民と政府の間に大きな不信感を生む原因になっている。ところが、日本では「手つかずの自然」とは異なる「人での入った自然」こそ保全すべきだという、いわゆる「里山保全」が主張されはじめている。里山では、人びとの生活と密接にリンクした人為的生態系が存在し、それが多様な動植物の生息地として機能しているという。

しかし現在語られる「里山」は理想化されたものであるだけでなく、時代を通じて「多様で持続的な自然利用が存在したはず」という固定観念が存在する。里山の利用も、社会情勢、政治、経済、自然環境などの要因によって時代ごとに変容してきたと考えられる。ところが、これまでの里山研究では、一地域の自然資源利用の実態と変容を、統合的かつ通史的に明らかにした例は非常に少ない。

人が自然資源を利用するには、個人、集団レベルにおいて自然に対する総合的な知識が必要だけでなく、特に近世以降は商いとしての自然資源利用（生産と販売に関する経済的な知恵）も不可欠な要素となる。ところが、生業研究に関しては、研究者側の学問分野の細分化によって、本来、統合的な知識である人々の自然資源利用を、それぞれの学問分野から個別的に研究する傾向が強い。日本において、すくなくとも近代以降、人が自然をどのように利用してきたのかを明らかにするには、フィールドに根ざした研究を基礎としながら、さまざまな分野の研究者が学際的におこなう必要があると考えるに至った。そこで今回の共同研究をさらに発展させるために、来年度から、新たな共同研究（「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」）を立ちあげることを目指している。

歴博がおよそ20年間おこなってきた共同研究（今回の共同研究を含む）は、学問的成果を上げてきたが、問題点も顕著になっている。多分野の研究者が参画すればするほど、最終的な研究成果が、異なる学問分野ごとの単なる集成になり、共同研究による新しい発見や融合した成果を実現できないことが多い。

今回の共同研究では、前回の共同研究の問題点を反省しつつ、以下のような方向で行う予定である。第1の特色として、歴博がこれまであまりおこなわれてこなかった千葉県をフィールドにし、異なる学問分野の研究者が同じフィールドで調査することにある。研究者同士が共通した研究対象を有することで、議論がより深まることが期待できる。

第2の特色は、明確なエンド・ポイントを設定することにある。環境利用や生業研究という共通

のテーマを研究するさいも、学問分野によって興味と最終的な目的は異なる。しかし本研究では、「選定した地域内の村落の自然環境利用・自然資源利用・生業についての歴史的な変遷を定量的に明らかにする」ことを第1の共通目的とする。

第3の特色は、成果公開として植物苑や常設展示の副室利用、それに千葉県内での巡回展示をおこなうことを視野にいれている点である。展示という共同作業をおこなうことで、統合化した成果を公開することが可能になる。また千葉県内における巡回展示は、はじめての試みである。

本共同研究では、人の自然利用を明らかにするには、生業間の関係性を把握することが重要であることが指摘することができた。そしてこれまでの共同研究そのもののあり方について問題点を整理して、次回の共同研究に結びつけることができたことが、最大の成果だと考えられる。

(国立歴史民俗博物館研究部)